

自閉症スペクトラム児に対する条件性弁別に基づく 要求言語行動の指導

The effect of mand training based on conditional discrimination
for a child with Autism Spectrum Disorder

○吉成 希¹・田口 典子¹・半田 瞳¹・高浜 浩二²

(作新こころの相談クリニック¹) (作新学院大学大学院心理学研究科²)

Nozomi Yoshinari, Noriko Taguchi, Hitomi Handa, Kohji Takahama
(Sakushin Mental Clinic) (Graduate School of Psychology, Sakushin Gakuin University)

Key words: 自閉症スペクトラム 要求言語行動 行動連鎖

【問題と目的】

他者との関わりが少ない自閉症スペクトラム（以下、ASD）児にとって、言語の自発的使用を獲得させることの重要性が指摘されている（長沢・森嶋、1992）。しかし、ASD児の場合、言語レパートリーを持っていたとしても、関連する環境によっては行動が生じなくなってしまう場合があり、環境に合わせた行動型や行動連鎖を形成する必要がある（吉川・藤原、2007）。そこで本研究では、要求場面において不適切な行動を繰り返すASD児に対して、条件性弁別の枠組みから指導を行い、環境に合わせた自発的な要求言語行動が獲得できるかを検討した。

【方法】

参加児：自閉症と診断を受けた特別支援学校に通う小学2年女児（以下CL）。3語分程度の言語表出は可能で、学校であった事などを報告することはできた。しかし、要求場面では、スタッフをじっと見つめる、周囲をうろつく等の行動が多く、スタッフの注意が向かないと不適切な行動をすることが観察された。6歳9か月時に行った田中ビネー知能検査Vでは、MA：4歳8か月、IQ：69であり、同時期に行ったS-M社会生活能力検査の結果は、SQ：3歳11か月であった。**場面：**X年6月～X+1年2月に、クリニック内のプレイルームで実施した。週1回1時間のセッションを設け、課題や休憩中の遊びの中に場面を設定した。**手続き：**<BL>遊びに必要な物がない場面を設定して、適切な要求行動が生起するかを評価した。色塗り課題では色鉛筆がない場面、休憩中の遊びで行っていたボーリング課題ではボールがない場面を設定した。要求充足者はCLから約5m離れたところに後ろを向いて立つという形式で行った。3試行で1ブロックとし、3セッション実施した。<TR>段階1～5まで設定し、休憩中のボーリングのみでTRを行った。段階1では、要求充足者がCLの隣に、横向きでボールを持って立っている状況から開始した。ボールがない場面では、CLの反応の前に「○○先生」と呼ぶようスタッフが言語プロンプト（以下言語P）を提示した。その後、呼名が生じた場合には、要求充足者がCLの方に振り向き、「ボール貸して下さい」と要求するようスタッフが言語Pを提示した。段階2からは言語Pを抜き、段階3からは要求充足者がボールを持たない状態で行った。段階4では、要求充足者はCLから5m離れた位置に横向きで立つようにし、段階5では、CLから5m離れた位置に要求充足者が後ろ向きで立つ条件へと移行した。段階1は、言語Pありで呼名（○○先生）＋要求（ボール貸して下さい）が生起することを、段階2からは、自発で呼名＋要求が生起することを正反応とした。正反応の場合には、要求対象物を提示するとともに、要求充足者とスタッフからの言語称賛、ハイタッチや抱きつくなどの身体的強化を行った。誤反応

の場合には、直後に言語Pを提示し、無反応の場合には3秒待ってから言語Pを提示した。2ブロック連続正反応を基準として段階を移行した。それ以外はBLと同様であった。<PR>要求充足者、スタッフからの言語称賛や身体的強化をなくし、BLと同様の手続きで実施した。

【結果】

各ブロックにおける要求言語行動の正反応率を図.1に示す。BLでは、適切な要求行動は生じなかった。TRでは、段階2の1試行目で、スタッフを見つめるのみで要求言語行動が生起せず、言語Pを必要とした。段階3の1、2試行目も同様に言語Pを必要としたが、その後は安定して自発で言語要求できるようになった。PRでは、ボーリング場面では全て正反応であったが、色塗り課題では呼名が生起せず、その代わりに、要求充足者の背中を叩く行動が見られた。

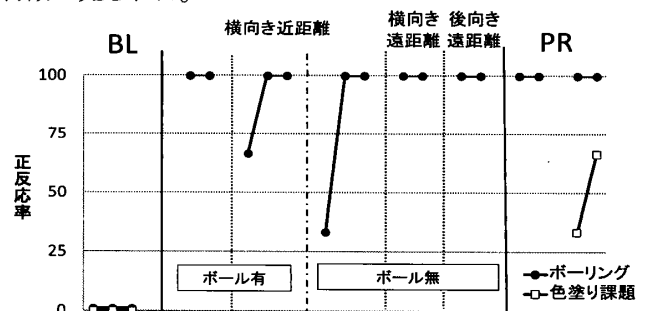


図.1 要求言語行動の正反応率の推移

【考察】

本研究の結果から、ASD児に条件性弁別に基づいた指導によって、環境に合わせた自発的な要求言語行動が獲得できることが示唆された。その要因として、①要求の注意喚起の機能を有する呼名反応を含む行動連鎖の形成、②要求に関する環境刺激の段階的な変化、が挙げられる。

一方で、直接訓練をしていない色塗り課題で正反応率が100%にならなかった。これは呼名の代わりに背中を叩くという反応が生じたためである。要求充足者の背中をたたくという行動は要求充足者への注意喚起の機能があることから、トレーニングをした呼名とは機能的に等価であると考えられる。このことから、直接訓練をしていない課題においても、実質的には般化したと言える。本研究では、日常場面での般化を確認するまでに至らなかった。日常場面では、より複雑な弁別が求められる可能性があり、自発的な要求言語行動の生起を促進する条件についてはさらに検討する必要がある。

【引用文献】

長沢・森嶋（1992）特殊教育学研究, 29(4), 77-81. / 吉川・藤原（2007）教育実践学論集, 8, 37-46.